

# Music

## カボ・サン・ルーカスへの旅と 『チャブーカ・グランダのフィナ・エスタンパ』

Text: George Cockle  
文/ジョージ・カックル



メキシコではマジックがよく起こる。僕のメキシコへの最初のサーフトリップは、カボ・サン・ルーカスだった。サンフランシスコ州立大学の学生の時だ。僕も含めて5人で行ったが、そのうちサーファーはふたりだけ。他はスペイン語が話せるというジェフ(スペイン語でヘフェ)、もうひとり金持ちで、酒をおごってもらおうという魂胆があり、最後のひとは大きなアメ車を持っていたからだ。考えてみると、僕に声をかけた理由は、きっと僕が車を直せたからだだろう。それほど仲のいい5人組ではなかったけど、思い出してみると、それが良かったのかもしれない。知り合い程度だったから、お互いに気を使って、わがままを言うヤツはいなかった。

僕らは巨大なアメ車に乗り、南へと向かった。SFから国境までは問題がなかった。メキシコに入ると、ちょうどペソが値下げされ、ドルの価値が高くなっていた。しかしそのせいか、メキシコにはガソリンがなくなってしまっていた。ガススタンドは昼間しか営業せず、夜になる前に売り切れ。砂漠の中にあるスタンドにたどり着いても、次の朝まで車の中で待つしかない。普段はカボまで2、3日で行けるはずなのに、一週間ぐらい

かかってしまった。車は故障するし、大変だった。その上、小さな村で見つけたカフェでは、スペイン語が得意なはずのヘフェに面喰らった。ビールとチップス&サルサをオーダーしてもらったはずが、20分も待たされたあと、レスラー顔負けの強面の男が運んできたのは、テーブルがいっぱいのフルコース。さっきまで近くにいたおばちゃんはいない。その男が出してきた領収書を見ると、さらに仰天した。僕達がはめられたのか、言葉が通じなかったのか不明だった。でも一つだけ明らかになったのは、ヘフェが実はスペイン語をほとんど話せなくて、一緒にメキシコへ行きただけということ。

カボにたどり着いたのは、夕方。ビーチにテントを張り、何人かが食事用のロブスターを獲りに海へ潜りに行った。その晩は茹でた美味しいロブスターディナーだ。砂丘の向こうから優しい女性の声の歌が聞こえてきた。「フィナ・エスタンパ、キャバレロー、フィナ・エスタンパ」。その歌声にひかれて、僕は一人でその音楽の方に歩きはじめた。砂丘の裏にはテントが一つあって、カップルがいた。僕はハローと言って挨拶した。男が「座ってビールでも飲むか」と誘

ってくれた。そして、彼らのラジカセから流れていた音楽の話になった。ペルーの歌のクween、チャブーカ・グランダだった。ナイロン弦のアコギギターと声だけ。彼女の歌は、スペイン語がわからない僕の心にまで響いてきた。僕たちはキャンプファイヤーの前で話しながら、そのレコードを寝るまで聴いていた。彼らは二人とも僕と同じハーフだった。男性はウルグアイとイギリス、彼女はパラグアイとイギリス。まさに僕は心の癒しの場を見つけたみたいだった。

その後、アメリカに帰って彼らのレコードを探したが見つからず、やっとSFのメキシコ街にある小さなレコード屋で見つけた。今でも彼女の歌を聴くと、あの砂浜で二人と過ごした時間を思い出す。日本のCDショップで探すのは難しいと思うが、インターネットでならすぐ見つかるはずだ。「フィナ・エスタンパ、キャバレロー、フィナ・エスタンパ!」あの優しい歌声が頭の中に永遠に残る。



ジョージ・カックル ● 60〜70年代のロックに精通し、ラジオ・パーソナリティとしてインターFMや東京FMで活躍中。鎌倉出身・在住。波乗り歴38年の親父サーファー。  
www.whatsupmusicinc.com